

SYMPOSIA

第一部門 (本館2階 C201 教室)

近代イギリス演劇におけるスペクタクルと音楽

司会・講師	白百合女子大学教授	南 ^{みなみ}	隆 ^{りゅう}	太 ^た
講師	中央大学教授	新 ^{あら}	井 ^い	潤 ^{めぐみ}
講師	東北大学准教授	岩 ^{いわ}	田 ^た	美 ^み
講師	筑波大学准研究員	松 ^{まつ}	田 ^だ	幸 ^{よし}
				喜 ^き
				子 ^こ

イギリス演劇のスペクタクル化と English Pantomime の成立

南 隆 太

今日、English pantomime と聞けば、すぐに思い浮かぶのはクリスマスの時期に上演される子ども向けのおとぎ芝居であろう。しかし、18世紀初期にイギリスの劇場に登場した pantomime とは、Harlequin を中心とした無言劇の Harlequinade のことであり、興行的には成功をおさめ、劇場経営を支える一方で、一部の演劇人や批評家からは批判を受けてきた。そのような18世紀の pantomime の流行の背景には、1737年に成立した Licensing Act の影響もあった。この Theatre Licensing Act が1843年に廃止され、ロンドンの勅許を受けた2劇場以外でも科白劇の上演が可能になると、pantomime は独自の発展を遂げ、ヴィクトリア朝のイギリス演劇全体にみられる大きな変化に呼応して、大きく変容するようになる。本発表では、pantomime の発達を辿り、19世紀後半に起こった変化を、主要な作品と同時代の劇評等の記録を参照しながら、無言劇の pantomime のスペクタクル化とミュージカル化の結果としての English pantomime の成立について考える。

サヴォイ・オペラと「イギリス的」演劇

新 井 潤 美

ヴィクトリア朝の演劇で、現在でも上演され、高い人気を保っているのは、W・S・ギルバートが作詞、アーサー・サリヴァンが作曲を手がけた、一連の「サヴォイ・オペラ」と呼ばれるコミック・オペラであり、ワイルドやショーの作品を除いたら、現在商業的に上演されるのはサヴォイ・オペラだけであると言っても過言ではない。当時、数多く書かれたコミック・オペラの中でも、現在残っているのはサヴォイ・オペラだけであり、また、それぞれ独自に戯曲作家、作曲家として高い評価を得ていたギルバートとサリヴァンのいずれも、単独で創った作品、あるいは他の作曲家や作詞家と組んで創ったコミック・オペラは今では上演されることはめづらしい。ヴィクトリア朝の中産階級に好まれた、いわゆる「ミドル・ブラウ」文化の代表のようなサヴォイ・オペラは、二十世紀後半のイギリスの「反ヴィクトリア朝」的風土を生き抜き、人種差別、階級意識、女性蔑視などといった様々な批判にも関わらず、「イギリスのヘリテージ」として受け入れられている。これらの作品は、筋書きがきわめて荒唐無稽なものであり、スペクタクル、メロドラマ、笑劇、パントマイムといった、当時の劇場で人気のあった演目のあらゆる要素をつめこんだものともいえる。ヨーロッパ大陸のオペレッタとは明らかに異質の、猥雑ともいえるこの演劇形態について、それがなぜ、ここまでの人気を得て、現在で

も「イギリス的なもの」として定着しているのかを、サヴォイ・オペラ、そしてヴィクトリア朝の他の演劇作品をとおして考察することによって、「イギリス的」として好まれる演劇作品および文化の特質に目を向けていきたい。

シェリダン演劇のスペクタクル性

岩田美喜

ことばの誤用で有名な Mrs Malaprop というキャラクターを生み出したことなどもあり、R. B. Sheridan は、軽妙な会話を得意とした「聞かせる劇作家」だと解されることも多い。だが当然ながら、彼は同時に「見る」ことを重要視した 18 世紀的感性を持つ演劇人でもあった。シェリダンが David Garrick からドルリー・レインの支配人を引き継いだのは、1776 年のことである。どちらかといえば低予算・少人数で芝居を上演していたコヴェント・ガーデンの Thomas Harris と違って、この時期のドルリー・レインは大がかりな舞台効果を高めることに務めていた。例えばギャリックは、1771 年にパリからロンドンへやって来た画家 Philippe Jacques de Loutherbourg と出会い、73 年には彼をステージ・デザイナーとして起用している。

本報告では、*The Critic* (1779) や *Pizarro* (1799) といった、シェリダンがルーテルブルーのデザインを活用した戯曲を分析し、彼が劇作家兼劇場経営者として演劇におけるスペクタクル性をどれほど重要視していたかを考えたい。

Scottish Ballad Opera のスペクタクル

松田幸子

18 世紀初頭、それまで「異質」だとされてきたスコットランドの音楽が、ロンドンで脚光を浴びるようになる。17 世紀後半以降数多く出版されるようになったバラッド集には、スコットランド発祥（とされる）バラッドが収録され、18 世紀初頭には、題名に「スコットランド」を冠した歌曲集も登場した。さらに、*Beggar's Opera* (1728) を嚆矢とするバラッド・オペラの流行を受けて、ロンドンでは、スコットランドのバラッドを用い、スコットランドを舞台としたバラッド・オペラも上演されるようになる。

本発表では Scottish Ballad Opera として上演された *Patie and Peggy* (1731) や、*The Highland Fair* (1731) を分析することで、「異質」とされてきたスコットランドのバラッドが、ロンドンの劇場にいかにか包摂されていくのか、そのような Scottish Ballad Opera の持つスペクタクル性が、イングランド（あるいはブリテン）の過去を想像/創造する過程といかに結びついていたのかについて論じる。

第二部門 (本館2階C202教室)

詩のことばと散文のことば 韻文の存在理由を探る

司会・講師	明星大学教授	笠原順路
講師	熊本県立大学教授	村里好俊
講師	津田塾大学准教授	阿部曜子
講師	龍谷大学教授	福本ただ幸之

人がある形式で何かを語る場合、必ずやその形式でしか表現し得ない「何か」があるはずである。「小説の勃興」以来、文学が散文に傾斜したことは明らかであるが、韻文はいつの時代にも存在していた。近代において詩は、散文との関係の中で、場合によっては棲み分けをしながら、存在してきたのかもしれない。だとするなら、散文的な領域と詩的な領域の境界線はどこに存在するのだろうか。あるいは、散文の領域が拡大するなかで、詩を書くという営みはどういう意味をもつようになったのであろうか。本シンポジウムでは、ルネサンスからロマン派までの時代において、散文で詩論を書いた詩人や、韻文と散文の境界線上で創作した詩人たちの作品の具体的なテキスト分析を通して、散文とのせめぎ合いや交渉といった視点から、韻文の存在理由を探ってみたい。

シドニーにおける韻文と散文

村里好俊

Sir Philip Sidney は、*The Defence of Poesy* の中で、「真の詩を作るのは、別段、脚韻とか韻律ではなく」、「詩の目的は読者を教え且つ楽しませること、すなわち、喜ばしい教え」であり、「詩は…何かの再現、模造、あるいは描出であり、比喩的に言うところ、教え且つ楽しませるといった目的を持った物言う絵なのである」と述べる。〈物言う絵〉という概念はさらに敷衍され、「…その楽しく教えるという手段によって、美德、悪徳、その他諸々の秀でた画像を模造することが、詩人を識別する正当な目印なのである」と説明される。

本発表では、Sidney が考える恋愛詩とは何かを描いた *Astrophil and Stella* 1 番と、散文で書かれた地の文の中に数多くの歌が織り込まれ、物語を語る各巻の間に牧歌集が組み込まれた「歌物語」と評してよい作品、*The Arcadias* を取り上げ、具体的に分析する。初稿の *The Old Arcadia* を大幅に改作・推敲した未完の大作 *The New Arcadia* は散文作品ではあるが、Sidney は〈英雄叙事詩〉として構想した。たとえ散文で書かれていても、自らの作品を「叙事詩」としたシドニーの意図は、どこにあったのかを探ることを目指したい。

‘luxuriant’な想像力をいかに制御するか (またはしないか)

Dryden の韻律に関する理論と実践

阿部曜子

王政復古期のイングランドは、修辞不信、新哲学の台頭などに見られる、ある種の「散文主義」が浸透した時代である。文芸の分野においても、言葉の平明さ、透明性、自然さといった

価値に重きが置かれる中、散文と韻文とを引き較べる議論がこれら中庸の美德をめぐる綱引きの様相を呈することもしばしばであった。1660年代の「脚韻論争」の過程で、Howardがblank verse (rhymed verseに比べてより「散文的」とされていた)で書かれた戯曲の「自然さ」を主張したのに対して、Drydenが脚韻によって「放埒な想像力を統制」する重要性を強調したことなどはその良い例である。では、韻律によって制御されなければならない「放埒／過剰／奔放」の内容、およびそれと詩作との関わりはどのようなものであったのか。後期のオード“Alexander’s Feast”を中心に、DrydenのCowley評や17世紀末の詩論におけるピンダロス風頌歌の位置づけなどにも触れつつ検証したい。

経験するテキスト

ポウプの韻文表現についての一考察

福本 宰之

ポウプにとって、韻文で作品を書くことの意義は何であろうか。その答えは、彼が『批評論』でwitに与えている定義、「しばしば考えられてきたが、決してうまく表現されたことがないもの。／それが真実であることは一目見ただけで確信出来て、／頭の中でぼんやり描いていたものをくっきりとした映像にして返してくれる何か。」(298-300)に深く関わっている。彼の風刺作品を例として考えれば、三流詩人の駄作を揶揄する際、散文で長々と説明するのではなく、一読しただけでそれが駄作と確信出来るような表現を案出することこそ、流儀に適った、wittyなやり方なのであった。この目的のためにポウプが採ったのが、自らのideaを読者に読ませるのではなく経験させるという手法であり、韻文はそのために欠かせない形式であったのだ。それでは、このように韻文の形式が孕む可能性を最大限に活用するという発想を詩人はどこから得たのであろうか。この点も、当時の時代思潮と照合して考えてみたい。

横溢する叙情性

WordsworthとByronの場合

笠原 順路

本発表では、まず(1) Wordsworthが*Lyrical Ballads*第二版の序文で述べた詩の定義‘poetry is the spontaneous overflow of powerful feelings …’の直後に続く一節で述べている「韻律の音楽的要素が与える pleasureにより、painが緩和される」という件を手掛かりにしてpainとpleasureという観点から‘Solitary Reaper’(1807)を読み、(2) painとpleasureの混淆または融合を、「生理—精神」機能の観点から「心の拡大と縮小」と言い換え、その軌跡をByron, *Childe Harold’s Pilgrimage*, Canto IV, Sts. 128-45のなかに辿り、語り手の自我意識が、拡大・縮小を繰り返しながら、廢墟のなかで己を語り、最終的に拡大して廢墟に同化してゆく過程を検証し、(3)そして結論として、近代社会の成立以降、散文が、もっぱら社会のなかで成長してゆく人間の日常を、万人に共通の時間軸に沿って写實的にたどるという方向に進んでいったなかで、韻文は、孤独な個人の内面の、凝縮した非日常的な瞬間を描く方向へと縮小していった点にロマン主義の時代の韻文の存在理由がある、と説く。

第三部門 (本館2階C203教室)

ヴィクトリア朝イングランドの都市化と放浪者たち

司会・講師	中京大学教授	武井 暁子
講師	広島大学教授	要田 圭治
講師	大阪市立大学教授	田中 孝信
講師	日本大学准教授	関田 朋子

本シンポジウムでは、ヴィクトリア朝の人々の生に変容を迫った都市化という現象を包括的に捉えなおす。産業革命と囲込が進んだイングランドでは、19世紀半ばにかけて、かつてないほどの勢いで人口が都市に流入した。過酷な労働と隷属状態に等しい生活を強いられる労働者たちは、経済的要因ゆえに自由を篡奪されたが、エンゲルスも指摘するように、都市で生活すること自体が、そこに生息する者を孤立した「個」へと幽閉していった。この状況を、さらにフーコーの生権力の概念を通して捉えなおすと、都市部の労働者たちが見えない「監獄」に幾重にも絡めとられていたことがわかる。

一方、ヴィクトリア朝の文学作品には、一箇所に腰を据えることなく移動を余儀なくされる人物たちが多数登場する。仕事を求めて転々と渡り歩く者たちがたどる道には、都市部の監獄に縛りつけられている者たちを襲う問題とはまた別の試練があった。

都市、生者たちのネットワーク

要田 圭治

Charles Dickens の初期の短編 “The Black Veil” (1836) を糸口にして、19世紀イギリスの都市について考えることができるだろう。一人の男の刑死体をめぐって展開するこの作品は、死に眼差しを向けることによって、社会に生じた変化と、それに伴って芽生えた新たな感性を際立たせているからである。事件が起きるのが1800年頃とされている事実もまた、ある社会的な出来事と微妙に符合する。1836年には身分登録の制度を教会から行政機関に移す法律が制定されて、生の管理を基本原理とする社会の到来を告げた。本発表では、都市における「個」と人口集団を中心に生権力の問題系の中で考えてみたい。公衆衛生に対する関心の高まりと諸々の実践、また労働者住宅の建設などは新しい秩序原理に基づいた典型例とみなせるが、資料が伝える事件や出来事は、文学作品と呼応し合って、生と権力の抜き差しならない関係を如実に物語ることになるだろう。

放浪者への眼差し

その秘められた欲求

田中 孝信

放浪者は様々な形で *King Lear* を始め数々の文学作品に登場してきた。それは、彼らに対する社会的関心の反映と言えよう。放浪者は、慈善を施すべき憐れな対象である一方で、管理が強化された19世紀にあっては、数値化と分類を拒むがゆえに厄介な「非社会的存在」となる。1824年に制定された Vagrancy Act こそは、警察による取締りによって秩序を維持しようとする姿勢の顕著な表れと考えられる。だが、そうした姿勢は、放浪者に対する恐怖の裏返しである

のは間違いない。彼らは中産階級の価値観を侵す脅威と映るのである。そのとき彼らは、権力者側の抑圧された欲求を露わにするばかりか、羨望の的となる可能性すら秘めている。そもそも慈善活動や実態の潜入調査にも本来の目的とは相容れない要素が含まれているのではないだろうか。本発表では、文学テキストや新聞雑誌記事を通して、放浪者に対する権力者側の眼差しの重層性を階級と性の観点から分析してゆきたい。

産業都市マンチェスター 囚われる労働者、逃れる労働者

閑田 朋子

19世紀の社会問題小説には、二つの一見相矛盾する伝統的特徴が見られる。第一に、先行するディスコースに賛否を示すために、そのある部分を書き変えて作品に取り込む傾向。第二に、現実に即していることを謳い、実在する産業都市を舞台とする傾向である。そのため北部工業地帯を象徴するマンチェスターが繰り返し描かれ、マンチェスターに関する言説が言説を生むことになる。

本発表は、上記二つの特徴を典型的に示すギヤスケルの作品と比較しながら、ヴィクトリア朝前期から中期における先行—後続作品の流れのなかで、マンチェスターの労働者階級の登場人物たちの表象と、その表象の変化を考察するものである。産業化の波にもまれて田舎を追われマンチェスターに流れついたものの、この産業都市に囚われて破滅していく、または逃れる道を見出す労働者たちに焦点を当てる。

崩壊するウェセックス 農業不況と流浪の民

武井 暁子

ハーディの小説の中心舞台となるウェセックスは、迷信とフォークロアが依然として色濃く残る農業共同体で、産業革命がもたらす経済発展の波に乗り遅れた感がある。例えば、*Far from the Madding Crowd* (1874) では、紆余曲折はあるものの、最終的に農業経営は安泰で、労働者の定住性は守られるかに見える。だが、*The Mayor of Casterbridge* (1886) の主人公 Henchard は行商の干し草商人で、その後、市長職に就くも、結局日雇い労働者になり、貧困生活に逆戻りする。*Tess of the D'Urbervilles* (1891) では、Tess は農場で臨時雇いとして働き、Angel はブラジルで農場経営を目論み、挫折する。このように、ハーディの作品を時系列的に見ていくと、農業の不振ゆえの労働者たちの不安定な経済状態と流動化の現象が浮かび上がる。



第四部門 (本館3階C301教室)

1990年代以降のイギリス映像文化を読む？

司会・講師	上智大学准教授	松本朗
講師	東京学芸大学非常勤講師	大谷伴子
講師	早稲田大学グローバルCOE研究員	エグリントン みか
講師	一橋大学教授	三浦玲一

これまで、現代のイギリスの映画を論じる際には、そこに表象されるサッチャリズムとその保守主義、すなわち、大英帝国へのノスタルジアあるいは「ポストインペリアル・メランコリア」(Paul Gilroy)を批判的に読む試みがなされてきたように思われる。9.11以降のアメリカとその文学・文化を論じる時に、共和党ブッシュ政権やその好戦的な保守主義への批判がこめられていたように。その対抗として想定される政治的立場は、*An Inconvenient Truth* (邦題『不都合な真実』2006)なども含むリベラリズム、あるいは、文化的には、多文化主義やアイデンティティ・ポリティクスといった言説だったのだろうか。

本シンポジウムは、このような英米両国にみられた保守主義ではなく、ブレア政権のニュー・レイバーや「第三の道」(Anthony Giddens)、あるいは、英米両国を横断するリベラリズムの政治文化に関わるような映像文化のテキストを取り上げ、それらを新たなやり方で読む方法を提案する。その際に、旧来のやり方で「文学」と「文化」、「読むこと」と「見ること」を峻別することはせずに、〈英文学〉、〈イギリス文化〉、そしてわれわれの〈現在の歴史性〉を繋いでみたいと考えている。

The Queen が表象する “the people’s princess” 「国際的中流文化」と「グローバル・ポピュラー・カルチャー」の対立？

大谷伴子

1980年代を代表するヘリテージ映画がサッチャリズムの文化であるならば、90年代の映像文化はブレア労働党政権とどう関わっているのか。本発表は、こうした問いを出発点に、まずは、90年代以降のイギリス映像文化の地政学的空間をマッピングする。その上で、近年の英国文化においてその活躍が目覚ましい Peter Morgan 脚本の映画とその関連テキスト——英国TVトークショーの司会者D・フロストによる米国元大統領R・ニクソンのインタビューを演劇化・映画化した *Frost / Nixon* (2008) を含む——を、取り上げる。

とりわけ、ダイアナ妃の死をめぐる「王室典礼」を固持する女王エリザベス2世と“the people’s princess”という sound bite を用いて王室の「近代化 (“modernise”）」を唱えるブレア首相との対立を描いた *The Queen* (2006) の解釈を行うが、この映画テキストに表象される「ポピュラーなセレブ」、「モダニティ」、メディア・イメージ (絵画・写真雑誌・TVなど) の関係性に注目し、現在の文化政策研究でも主要な論点となっている問題設定に有意義に接合する可能性を探る。すなわち、新しい「国際的中流文化」(あるいはミドルブラウ文学)と(旧来のサブカルチャーとは異なる)「グローバル・ポピュラー・カルチャー」という二項対立。

‘Cool Britannia’から‘Broken Britain’へ、そしてヘリテージ文化産業への回帰？ 舞台表象、特に Gurpreet Kaur Bhatti 作 *Behzti* (*Dishonour*) を中心に エグリントン みか

1997年 New Labour は、「文化省」の名称を The Department for National Heritage から The Department for Culture, Media and Sport へと変更し、クリエイティブ産業、地方分権主義、多文化主義を推進していった。13年後、イラク戦争、7/7、不況で疲弊した‘Broken Britain’の克服を唱えて政権を奪取した保守党党首 David Cameron は、戦後最大とされる予算削減を行う一方、‘Cool Britannia’を却下し、2012年のロンドン・オリンピックを筆頭とした文化遺産観光業に力を注ぐことを宣言した。これは、労働党政策の言換えなのか、過去の保守党政策への回帰あるいは刷新なのか？

本発表では、上記の80年代のヘリテージ文化産業から90年代の‘Cool Britannia’、2000年代の‘Broken Britain’、そして現在に至る世相を映した舞台に加え、Arts Council や国際芸術祭などの文化政策の変容に目を配りながら、シーク教徒女性作家 Gurpreet Kaur Bhatti が巻き起した「パフォーマンス」*Behzti* (2004) を扱う。英語圏を代表する Caryl Churchill に連なる Bhatti の政治的スタンスを分析しながら、フェミニズム、多文化主義、言論の自由といった諸問題をも考察する。

ディザスター映画とグローバル化 Roland Emmerich, *Independence Day* (1983) を中心に

三浦 玲一

グローバル化という文脈のなかで（英国の）ナショナル・カルチャーの変容を見るというプロジェクトの傍証というか補助線というか、そのような意味で、90年代のハリウッド映画においてグローバル化はどのように描かれているかを見てみたいと思う。ここで逆説は、ハリウッド映画こそがグローバル化する文化だということ、つまり、グローバル化を客観的かつ批判的に描くことは脱ハリウッドだということである。というわけで、ハリウッドは、グローバル化をどのように抑圧・隠蔽して、その代わりになにを描いているのかを考えることになる。

具体的には、Emmerich の一連の作品や、*Armageddon* (1998)、*Deep Impact* (1998)、*Titanic* (1997) と、この時期（知的聴衆にはむしろ蔑視されながら）大流行した大災害映画を考えてみようと思う。批評的な論点は、新自由主義のレジームとリベラルな多文化主義の親和性の批判的検証になるはずである。

「進歩派」女優？ セレブリティ？ Vanessa Redgrave とイングリッシュネス

松本 朗

Vanessa Redgrave は、Lilian Hellman 原作 *Julia* (1977) でアカデミー賞助演女優賞を受賞した際のスピーチの〈政治性〉で物議を醸したこともある興味深いイギリスの女優である。本発表では、そのような「ポピュラー」にして「セレブ」な「進歩派」女優の〈政治性〉を踏まえた上で、*Blow Up* (邦題『欲望』1966)、*Mrs. Dalloway* (1997) 等における彼女とイングリッシュネスの形象を取り上げる。

〈英文学作品〉など従来は経済的なものとはみなされなかったものが〈商品化〉され、「ポピ

ユラー」なメディア文化に加えられたのが「ヘリテージ映画」以降の1980年代だとするならば、1990年代以降に、そうした「ポピュラー」化した文化イメージ、とりわけジェンダーやセクシュアリティの表象が、サブカルチャーの転覆性を包摂しつつ、いかに新自由主義（neoliberalism）としてあらわれる後期資本主義のグローバルな商品化のロジックを刻印するようになったのか。こうした問題について、本発表ではポスト・フェミニズムという潮流も視野に入れながら、考えてみたい。



第五部門（本館3階C302教室）

中世ロマンスと〈個〉の多様性

司会・講師	広島大学教授	中尾佳行
講師	白百合女子大学教授	篠田勝英
講師	中央大学准教授	堀田隆一
講師	三重大学教授	西村秀夫
講師	立教大学教授	菊池清明

中世ロマンスは、作家が一定の〈型〉を継承し、それを独自の文脈に溶解し、再構築することで生み出される。〈型〉への忠実とその改変（編集、再編集）は、中世ロマンスの間テクスト性を不可欠のものとし、そのアレンジの仕方の中に、程度差こそあれ作家の個性が投影されている。換言すれば、〈型〉は作家の個性を引き出すための重要なフレームである。その〈個〉の認識は、作者、作品で多様性があり、その表現法もマクロからミクロまで多岐に渡る。マニユクリプト・コンテキスト自体も個の主張と見なせる。従来、中世ロマンスの〈型〉の同定、あるいはジャンルとしてのシステムの構築に重点が置かれてきた（Brown 2009, Scanlon 2009, Ashton 2010）。本シンポジウムでは作家の編集のプロセスに焦点を当て、どのような〈個〉が関与し、そして〈個〉がいかに〈型〉と関係し合っているのか、問題提起したい。

作者・語り手・主人公

一人称の問題

篠田勝英

フランス中世文学の初期はジャンルの継起的発生の歴史である。ラテン文学を範とした（すなわち内容・形式を借用・模倣した）聖人伝に始まり、騎士階級の理想とキリスト教的理想の総合を目指した武勲詩が生まれ、その後抒情詩と、個の内面に視線を向け始めたロマン（物語）がほぼ同時代に産み出されるようになる。作者が文字通り語り手であった武勲詩、一人称が一般的な抒情詩、作者が読者に語りかけるという形のプロローグを持つことの多いロマン、そして13世紀にいたり、一人称の〈わたし〉を主人公とするロマンが生まれる。今回の発表では、南仏抒情詩、いわゆるロマン・クルトワの諸作品の語りの構造を概観し、ふたりの作者による一人称の作品という特性を持つ *Le Roman de la Rose* の内在的構造を分析、特にほぼ同時代のアレゴリー文学の作品、Huon de Méry の *Le tournoiement Antichrist* との比較検討を試み、「一人称」の

問題を考察する。

Auchinleck MS のロマンスと中英語方言 個別化の視点から

堀 田 隆 一

中世イギリスロマンスは、騎士道、宮廷恋愛、冒険という主題で緩やかに結びつけられているが、その作品毎の表われは内容や形式の点で個別であり、結果として多様である。同様に、イギリスロマンスの媒体である中英語は、古英語以来の言語変化を共有しているが、その作品毎の表われは方言や書写習慣の違いゆえに個別であり多様である。文学と言語の両側面におけるイギリスロマンスの多様性は、フランス語からの翻訳や写字生の方言・書写習慣の差異というフィルターを通して繰り返されてきた「個別化」という過程の結果と考えられる。本発表では Auchinleck MS に含まれるロマンス作品 (*Kyng Alisaunder* 他) を取りあげ、主に形態論にみられる作品間の方言差を論じる。「方言の時代」と呼ばれる中英語の言語状況それ自身が中英語を個別化する装置として機能し、同時にロマンスの個別化にも関与した可能性を追究したい。

“Unknown”から“Known”へ *Lybeaus Desconus* 再読

西 村 秀 夫

自分の父親が誰であるのかはおろか、自分の本当の名前すら知らない若者が、単身乗り込んだ Arthur 王の宮廷で騎士に叙され、途中さまざまな冒険を経験しながら Lady of Synadoun の救出という自らに課せられた使命を完遂した後に、自分の父親が Gawain であったことを知るといふ Lybeaus 卿の物語は、まさしく〈個〉の成長・確立の物語である。aabaabccbddb という尾韻スタンザを基本形とするこのロマンスの現存する写本の数（15世紀のものが5点、17世紀のものが1点〈Percy Folio MS〉）からは、このロマンスが人気を博したものであったことがうかがえる。

本発表では、詩形・語彙・脚韻語・定型表現等の観点から主要な写本の異同を精査し、テキストの変更が Lybeaus という〈個〉をどのように〈多様化〉させているかを考えていきたい。

Sir Thopas における音と意味 ロマンスの解体と再構築

中 尾 佳 行

Chaucer は *Troilus and Criseyde* の宮廷ロマンスを語り終え、次は ‘som comedye’ (Tr 5.1789) を書きたいと言う。彼の自己探求は *The Canterbury Tales* を通して極められる。ロマンスは巡礼者の視点を通して扱われ、しかも違ったフラグメントに現れ、その立ち位置は異なる。新興階級がロマンスを語れば、それはファブリオに変質してもいる。Chaucer 自身が話す *Sir Thopas* は、従来ロマンスのパロディとしての側面が強調されてきた。しかし、ここにはロマンスの最終的な進化としての自己戯画化 (Hg MS の視覚化)、メタ言語・メタ文学的な認識の深さが読み取られる。〈型〉の破壊と同時に再構築、新たな人間像の創造が行われている。一つ概念メタファー「狭い空間には狭い心理が宿る」が再構築の基底部にあるように思える。特に同作品の音と意味の関係を取り上げながら、具体的に検証したい。

Sir Gawain and the Green Knight と「個」の意識

菊池清明

Gawain-poet の〈英語〉あるいは〈文体〉へのこだわりが、作品の中でどのような結果をもたらし、さらにはそれが「個」の意識とどのように関わり、どのような意味合いをもつロマンスとしての作品になったのか。様々な言語手段の駆使による登場人物の詳細な描写、迫真性そして個別性の根底にあるものは何であろうか。それらは、詩人がそれぞれの人間性、つまり「個」の人格を強く意識することなしには成立しえないものであろうか。そして、そこには、単なる神の被造物としての人間ではなく、自己に対する自覚と誇りを示す、固有の価値と原理を持った「個」の存在としての人間が認められるとあってよいのであろうか。14世紀の〈英語〉という言語に象徴される俗／民衆／周縁の文化を尊重することから新たな文学の地平が開けることを、そして〈vernacular language〉という媒介によってこそ、「個」の意識という行為が最も高められることをこの詩人は心得ていたのであろうか。人物描写と言語表現に注目しながら、本作品における「個」の意識を考えてみたいと思う。

第六部門 (本館3階C303教室)

英語音韻論についていま何が言えるか

司会・講師	東京大学准教授	た田	なか中	しん伸	いち一
講師	広島女学院大学准教授	やま山	もと本	たけ武	し史
講師	首都大学東京准教授	ほん本	ま間	なげる猛	

生成文法出現以降の英語音韻論の系譜を顧みると、草創期ともいえる60～80年代に精密な分析や様々な枠組みの提示を経てからというものの、90年代以降は教科書的な著作はあふれているとはいえ、主立った学術誌で英語音韻論を扱った研究論文はほとんどない状況にある。諸言語への理論適用がそれまで以上に盛んとなったからである。しかし、だからといってこの分野が円熟・衰退期に突入し、その鉅脈が発掘し尽くされたとは思えない。本シンポジウムでは、類型論を視野に入れた最適性理論の20年の進展を経たいま、英語音韻論について何が言えるかについて再考をはかることを目的とする。具体的には、1) いまだからこそ見えてくる新鮮な解釈を提示し、2) いまだ解けていない問題や旧理論で解けたことが解けなくなった問題を見直し、3) 未発掘の新しいデータを探求するなどの観点から、現在を「拡散から求心へ」の絶好の契機と捉えて議論を深めたい。

セグメントの音韻論

母音体系と音節量についての再考

山本武史

英語の母音音素は果たしていくつあるのだろうか？—この問いに答えるのは意外に難しい。例えばLPD³ (2008) は一般米語の強勢位置に現れる母音として15を挙げているが、いわゆるr音性二重母音や無強勢位置にしか現れないものを含めるとさらに数が増える。これを例えば5母音体系の日本語と比べて、英語には3倍以上の数の母音音素があると言ってもいいのだろ

うか？本発表の前半では、非常に基本的ではあるが今まであまり活発に論じられてきたとはいえないこの問題について考える。後半ではセグメントの種類が関わる英語の音韻現象として音節量の問題を取り上げる。一般に頭子音は音節量に寄与しないとされているが、-ativeが付加された語の副強勢の有無についてのNanni (1977)の分析はその反例になるように思われる。30年以上前に指摘されながら発表者が知る限りその後議論が見られないこの問題について考える。

音節構造の音韻論 母音間の子音列

本 間 猛

多くの音節構造の研究は、単音節語の両端の子音列の観察から始めている。それにひきかえ、多音節語の音節構造についての考察は、あまりない。例えば、Hammond (1999)の第三章は、その少ない例の一つだ。多音節語の語中の子音列の構成については、語末に見られる適格な子音列と語頭に見られる適格な子音列をつないだものとする考え方が広く行われている。前述のHammond (1999)もこの線に沿ったものである。しかし、論理的には、他の可能性もある。母音間の子音列が語頭のそれと同質であるとする立場(Onset主義)と母音間の子音列が語末のそれと同質であるとする立場(Coda主義)だ。英語においては、Onset主義は、例えば、normalのような語例から、すぐに否定される。連鎖rmは、語頭には見出されないからだ。だが、Coda主義については、一考の価値があるように思われる。本発表では、この点について、再考したい。

アクセントの音韻論 比較アクセント研究と統合理論

田 中 伸 一

本発表では、類型論を視野に入れつつ、英語のアクセント分布に関する統合モデルを提案する。80年代までの英語音韻論では、Hayes (1982)やHalle & Vergnaud (1987)などで名詞、形容詞、動詞などのアクセントについて解明されてきたが、1)ある種の例外に対する説明が残されていたこと、2)導き出された「一般化」が他言語のそれとどう関連しているのかが不明で適用できなかったこと、などの問題があった。90年代に入って最適性理論を用いたHammond (1999)の説明を見ても、1)、2)の問題とともに、3)英語アクセントに使用されている制約体系が独立の根拠をもたず、例えば日本語のアクセント体系にどう適用されるのかが不明であった。つまり、一般化という帰納的な側面にも、理論を用いた演繹的な検証にも、いまだ問題が残されているのである。そこで本発表では、英語と日本語の双方に適用できる「一般化」を提案し、従来例外とされたパターンや類型論をも取り入れたアクセントの統合モデルを、最適性理論の枠組みからアプローチする。